

『箴言集』¹(1678)207番における「folie」と 456番の解釈に介入する「folie」との相違についての一考察

プラトンの「洞窟の比喻」をめぐる

柴田恵美

はじめに

本稿においてこのテーマを選ばせていただいた理由、それは、筆者が執筆した博士論文『ラ・ロシュフコー 絶対王政を生きた反逆精神』²の審査、その口頭試問の席において、デカルト研究者である西村哲一先生より、副査として、次の2つのお言葉を賜ったからである。

ひとつめは、第1版以降、決定版に至るまで、箴言207番で用いられている「folie」という語が、現存する手書き原稿の中で最も古く最も確かなテキストであるリアンクール草稿(Manuscrit de Liancourt)1番の箴言では「enfance」という語であった事実について、この変更について考察することは、『箴言集』についての考察を深めることになるだろうというものであった。

ふたつめは、博士論文の公開口頭発表で筆者が具体的な説明を行った、『箴言集』(1678)456番における「esprit」=「raison」=「bon sens」(理性)という語、すなわちある意味で「folie」(狂気)とは対極をなすとも言えるこの語の内容が、プラトン(Platon, BC.428-BC.348)『国家』における「洞窟の比喻」とし

1 テキストとしては基本的に、La Rochefoucauld, *Maximes*, édition de J. Truchet, Paris, Garnier, 1978, La Rochefoucauld, *Réflexions ou Sentences et Maximes morales et Réflexions diverses*, édition établie et présentée par Laurence Plazenet, Paris, Honoré Champion éditeur, 2002を使用。随時、La Rochefoucauld, *Œuvres complètes*, édition établie par L. Martin-Chauffier, revue et augmentée par Jean Marchand, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1980も参照。和訳に関しては、すべて筆者和訳、二宮フサ訳『ラ・ロシュフコー箴言集』、岩波書店、岩波文庫、1989、を参照。なお、「箴言」部分と「考察」部分が共に含まれるものが『箴言集』と呼ばれる。

2 柴田恵美、お茶の水女子大学、2009。

て理解されうるだろうというご示唆であった。

「洞窟の比喩」が意味するものが筆者の論考における箴言456の「esprit」とどう関わってくるのか、また、仮に上記2点のご指摘を組み合わせた場合にどんな考察を得られるか等については、筆者の不甲斐なさ故に、今日まで取り組むことが出来ずにいた。この度この機会を与えていただいたことで、先生の思われていたであろう次元には到底到達できまいものの、ほんの一步だけ前進し、ささやかながら、一つの結論を導いてみたい。

以下に、リアンクール草稿1番における「enfance」という語を、『箴言集』第1版（初版）以降、著者ラ・ロシュフーコー（François VI de La Rochefoucauld, 1613-1680）が「folie」という語に変更したことによって起きる箴言全体の内容やニュアンスの変化及び語彙変更の理由、そして、この箴言207番で使われた「folie」と決定版456番の解釈に介入する「folie」が示す内容の違いを示し、さらに、プラトン『国家』³の「洞窟の比喩」の中に読み取れる「esprit」=「raison」、「folie」についての考察を述べてゆきたいと思う。

1. リアンクール草稿1番における「enfance」と第5版（決定版）箴言207における「folie」

a. リアンクール草稿1番における「enfance」について

リアンクール草稿は、

L'enfance nous suit dans tous les temps de la vie. Si quelqu'un paraît sage, c'est seulement parce que ses folies sont proportionnées à son âge et à sa fortune. (Ms. L1)⁴

という箴言から始まる。「enfance」という語に焦点をあて、まず、この箴言を構成する二つの文のうち、最初の一文が何を言わんとしているのか、田中仁彦

3 テキストとして、『プラトーン国家』II、長澤信壽訳注、東海大学古典叢書、1971を使用。

4 略号についてはM.=決定版、Ms.L=リアンクール草稿、M.P=没後刊行の箴言、M.S=削除された箴言、を表す。また単に、箴言～としている場合は決定版における箴言の番号を意味する。なお、『箴言集』からの引用にあたっては、テキストのページ数によらず、箴言番号を用いる。

の説をもとに簡単に記してみよう。

田中は、その著書『ラ・ロシュフーコーと箴言』⁵の中で、『箴言集』の基は、セネカ（Lucius Annaeus Seneca, BC.4-AD.65）の残した『ルキリウス宛書簡』の読後感想という形でラ・ロシュフーコーが書き溜めていった原稿にあるとしている。セネカの境遇に自身の前半生を投影し、共感を示していたラ・ロシュフーコーであったが、当時マレルブ（François de Malherbes, 1555-1628）によって伝訳された著書『ルキリウス宛書簡』*Lettres à Lucilius*を読んだことでセネカに対する評価は一変し、逆にセネカとストア派の思想に反発を覚えるようになる。そして、彼の覚えた反発こそが、『箴言集』の原点なのであり、最古の手書き原稿、リアンクール草稿の1番最初にこの箴言が置かれた事実そのものがこれを証明しているというのである。そして、その反発の根拠、この草稿の1番に対応するものとして、次のセネカの書簡を挙げている。

子供服を脱ぎ、大人のトーガ（長衣）に着替えて厳かにフォーラムへと連れていかれた日の喜びを、君は忘れはしないだろう。それはもう一方で、君自身が子供（enfant）の魂（âme）を脱ぎ捨てた日、哲学（philosophie）が大人の男のレヴェルへと君を引き上げた日とも言えるのだ。それまでの君は、幼年期（enfance）にあったとまでは言えずとも、実際は、子供（enfant）の精神性を引きずっていたのだ；我々にとって深刻なのは、老人の權威を身に着けながら、幼年期、子供、乳児期の欠点を持ち続けていることだ；子供はちょっとしたことも怖がるし、幼児は何でもないものに怯える。老年になってなお、我々はこの両方を引きずっているのだ。（ルキリウス宛書簡、4.2）⁶

この書簡で用いられた「幼児性」＝「enfance」という語を、ラ・ロシュフーコーが草稿の1番でそのまま用いていることから、彼がこの書簡に直に反応

5 田中仁彦『ラ・ロシュフーコーと箴言』、中央公論社、中公新書、1986。

6 Senèque, *Lettres à Lucilius*, 4.2. Texte établi par François Préchac, traduit par Henri Noblot, t. 1-t. 5, Paris, Les Belles Lettres, 2003. 筆者和訳。和訳には、高橋宏幸訳『倫理書簡集』セネカ哲学全集第1巻、岩波書店、2005及び塚谷肇訳『ルキリウスへの手紙・モラル通信』、近代文芸社、2005、を参照。

していること、彼の反発の強さが伝わってくる。また。この書簡を下敷きにすれば、書簡、箴言共に、何でもないことにも恐れを抱き、判断力が未熟で理性も哲学も備わっていない状態を「子供の精神性」あるいは「幼年期」と呼んでいることが分かる。従って、ラ・ロシュフーコーが、「幼児性は一生を通じてどんな時期にも我々に付きまとう」と言う時、それは、田中が主張するように、哲学＝理性をもってすれば、人間は常に彼らを翻弄する様々な情念に打ち勝ち、死という恐怖さえも恐れずに克服できると教えるセネカ、そのような偉大な人間像を掲げるストア主義に対する絶対的な否定であることに間違いはないと言えよう。

b. M.207「folie」への変更による効用

ところで、リアンクール草稿1番に掲げられたこの箴言が、第一版から第五版までは、207番の位置に置かれ、その全文は、

La folie nous suit dans tous les temps de la vie. Si quelqu'un paraît sage, c'est seulement parce que ses folies sont proportionnées à son âge et à sa fortune.
(M.207)

というものになる。冒頭のリアンクール草稿1番の箴言と比較すると、「enfance」という語が「folie」＝「狂気」という語に入れ替えられているだけで、第二文には全く変更が加えられていないことが確認できる。それでは、この変更によって、二つの箴言にはどんな意味やニュアンスの違いが生じるのであろうか。

その為に、まず、「enfance」と「folie」、2つの語意の対応関係を見てゆこう。17世紀当時において、「enfance」と「folie」は、理性に反するものであるという点において共通している。実際、田中が行ったようなストア主義的概念からの指摘に限らず、「enfant」あるいは「enfance」という語が、少なくとも中世～17世紀という時代において、理性「raison」の欠けた状態、弱さや隷属、判断力が十分に備わっていない状態をさすのだということは、共通の認識とも言えるものだった様だ。例えば、服飾史においては、理性の欠けた状態、狂気じみたという性質を表現する為に、その性質を象徴する黄色の布で仕立てた服を

子供に着せた⁷という史実がある他、パスカル（Blaise Pascal, 1623-1662）の著書『パンセ』⁸の中にも、「意志を持ちえない幼児」（enfant incapable de volonté）（434「恩恵」）という表現が使われている。さらに、デカルト（René Descartes, 1596-1650）は、幼児期を「大人になる以前、理性を完全に使用する以前の幼児期」と定義しており、その思考において、「言語活動の未熟な子供」を、狂人同様、十全たる理性を持つ大人の人間から分け隔てる傾向が見て取れる⁹。

一方、「folie」に関してはどうか。拙著『ラ・ロシュフーコー ルイ14世のまなざしに抗った時代の反逆児』の中でも記載したように¹⁰、『箴言集』に含まれる全19の数にのぼる箴言において使われている、folie, folies, fou, fureur など、「狂気」そのもの及びそれに類する言葉は、大別して2つの意味に分類されると思われる。ひとつは、①理性が失われた、あるいは理性に反する精神の状態。常軌を逸した、気違いじみて馬鹿げた状態・言行、もう一つは、②激しい情熱。熱狂的な恋、という意味である。「enfance」との関連を踏まえるなら、箴言207で用いられている「folie」は、①の意味により近いと考えられるが、大別された上記①、②の両方の意味を考え合わせるなら、「folie」へ

7 徳井淑子『図説ヨーロッパ服飾史』、河出書房新社、2010、pp. 46-47、徳井淑子『色で読む中世ヨーロッパ』、講談社、2006、pp. 137-140 参照。裏切りや嫉妬、危険、理性のなさを象徴する黄色の服を、道化や子供に着せた理由として、子供は、人格形成途上にあり、未だ理性を持たない存在として軽視されていたという見解が述べられている。

8 Blaise Pascal, *Pensées*, texte de l'édition Brunschvicg, édition précédée de la vie de Pascal par Madame Pertier, sa sœur, introductions et notes par Ch. M. des Granges, Paris, Classique Garnier Frères, 1974, p. 185, Br.

9 René Descartes, *Discours de la Méthode*, texte et commentaire par Etienne, Gilson de l'Académie française, quatrième édition, Paris, Librairie philosophique, J. Vrin, 1967, pp. 57-58. René Descartes, *Les Principes de La Philosophie, œuvres de Descartes*, publiées Charles Adam & Paul Tannery, Paris, J. Vrin, 1996, p. 25, p. 62. 『方法序説』第5部においてデカルトは動物と人間を分ける根拠として十分な言語活動によって証明される理性の有無を挙げているが、その説明において、「狂人でさえも」という表現、もしくは「（コミュニケーションを取りつつ話すことにおいては）最も愚かな子供、もしくは頭に障害のある子供にさえ、（最も完全なサルやオウムは）かなわない」という表現によって、通常の人間と狂人や子供を分け隔てる書き方をしている。また、『哲学原理』第一部1及び76においても、「大人になる以前、理性を完全に使用する以前の幼児期」「幼年時代の無思慮な判断」などの表現が見られる。

10 柴田恵美『ラ・ロシュフーコー ルイ14世のまなざしに抗った時代の反逆児』、駿河台出版社、2010、p. 97 参照。

の置き換えによって、「enfance」という語には含まれていなかった激しい情念という意味あいと、ある意味で理性とは対極に存するそれらの情念が与える、「気違いじみた」「激しい」「熱狂的な」といったニュアンス、イメージがこの箴言に付加されたことに気づかされるだろう。

c. M.207における「folie」の定義と箴言の意味

次に、この箴言全体の意味について考察を進めてゆきたい。田中は、この箴言の全体の解釈を、「人間は所詮狂気存在であるが、セネカのように悟りました顔をしていられるのは、年をとったり生活が安定したりしたおかげで狂気がたまたまバランスを保っているからにすぎない」として、「folie」に「狂気」というそのままの訳語をあて、文脈においては「幻想」という意味合いをにじませてはいるものの、フランス語での言い換えやその具体的な内容について直接的な定義はしていない¹¹。根底にセネカ批判があることは事実であり、概要は田中の解釈と同じではあるが、筆者はここで、箴言207で用いられた「folie」＝「狂気」の示す内容を、「情念＝理性を超えた激しい心（âme）の動き、何かあるいは誰かに対する強い執着、もしくは心を極度に高揚させるもの」＝「passion」と解釈し、後半部分で用いられた「sage」を、セネカが情念そのものを悪と断罪したことを鑑みて、「情念などには引きずられない思慮のある人間」と捉えたい。また、複数形「folies」＝「passions」は、「狂気」や「情念」そのものでなく、実際に形として現れる種々の情念、あるいは種々の情念によって人間が晒す狂気振りをさすと思われるが、そうした情念として、ラ・ロシュフーコーは『箴言集』の中で、恋、野心、虚栄心、金銭欲（吝嗇）、物欲、出世欲、名誉欲、権勢欲、嫉妬、恐怖などをとりあげている。また、「fortune」は、この場合、ポール・ベニシュの言うように、「passions, vertus, vices」などに、その結果のいかんを問わず出現を許す機会である¹²。この定義を踏まえた上で箴言207全体の意味についてより詳しく説明するなら、「われわれは一生、情念から解放されることはない。仮に誰かが情念に引きずられることなどない賢者のように見えたとしても、それは、その時にその人間が置かれた人

11 田中仁彦、前掲書、p.157参照。

12 Jean Lafond, *La Rochefoucauld, Augustinisme et littérature*, Paris, Klincksieck, 1977, p. 25.

生の時期、世間的状況・地位が、心を乱そうとする情念との間に均衡を保たせ、彼に心の安定をもたらしているように見えるに過ぎないのだ」というものになる。心を乱そうとする情念との間に均衡を保たせ、彼に心の安定をもたらしているように見えるというのは、どんな場合に生じるのか。例えば、何の地位も名誉もなく、野心という情念に取りつかれ、執着による心の乱れをあからさまにしていた若者が、ある時、望んでいた地位や名誉を手に入れた場合を考えてみればよい。情念に取りつかれていた心がその時だけは落ち着いて、少なくとも、次の新しい情念に捉われるまでは、彼は狂気振りをさらしたりはしないのだ。但し、それは食欲が満たされるのと同じ様に一時的なものに過ぎず、一つの情念が満たされた後、人間が新たな情念に捉われてしまう現実を忘れてはなるまい。

また、この箴言を考察 XVIII「引退について」の文章及び箴言 93、444 とすり合わせると、内容がより分かりやすくなる。

長い年月を生きてきた者は、勝ち得たその経験によって若い時にすべての者が欲するものの価値も、それをより長い時間楽しむことが不可能なことも知っている。(……) 出世、快楽、名声、その他人間を高めるものへと通じるさまざまな道は、彼らには閉ざされているのだ。(……) かつて彼らが胸ふくらませた数々の幸福には、もはや縁がなくなってしまった。栄光にさえ、ほとんど縁がなくなっている。かつて彼らが得た栄光も、歳月と共にすでに影が薄くなり、年を取るにつれ、人は栄光を得るより、失うことの方が多いためである。(……) 彼らは何もかも見てきたのである。(……) 自身の病気は自らの退屈をまぎらわせ、ほんの僅かな鎮静も幸福の代わりになる。衰えた自然は彼らよりも賢明なので、しばしば彼らから欲望の苦痛を取り除いてくれる。(……) 彼らの虚栄心さえも引退によって慰められるのである。(……)

この「考察」によってラ・ロシュフーコーは、「年を取るということは、若い時に持っていた、肉欲、出世欲、名誉欲といった様々な情念への縁も、それを追いかける手立ても、体力も徐々に失っていくことである。だから老人はそういった情念を若い時のようにあからさまにすることはなくなるかもしれない。

若さと引き換えに、年を取ることによって得た弱さ、つまり病気や鎮静が彼らの情念や欲望を癒し、幸福の代わりになるのだ」という自身の考えを語っている。しかし、逆に言えば、このことは、年を取って得たそうした弱さをもって、様々な情念や欲望を慰めることはできるが、完全に消滅させることはできないということの意味するのではないだろうか。だからこそ、

老人は悪い手本を示すことができなくなった腹いせに、良い教訓をたれたがる。(M.93)

というような事が起きるのだ。本意に反し、快楽をひたすら求めることのできなかった老人が、悔しがって賢者ぶり、そんな行いは良くない事などと若者に説教をしたりする。一方、肉体的にも立場的にも快楽という情念を追い求める事が極めて難しくなっているのに、敢えて若者の様にそれを求めようとする時、

年をとった気違いは若い気違い以上に気違いである。(M.444)

と、世間から揶揄されるのだ。老若を問わず「情念は一生われわれについて回る」のである。

d. 「enfance」から「folie」への変更の意図について

次に、ラ・ロシュフーコーが何故こうした語彙変更を行ったのかを探ってみたいと思う。

第一に挙げうる理由、それは、第2版で削除された他のいくつかの箴言についてのグラップス (Henry Grubbs, 1904-) の推察と同様、この箴言においてもセネカの直接的で色濃い影響の痕跡を消し、厳密な意味で自身の意に沿うような表現法を採用しようとした為ではないかというものである¹³。グラップスの主

13 Plazenet, « Historique des Maximes contenues dans l'édition de 1678 », dans La Rochefoucauld, *Réflexions ou Sentences et Maximes morales et Réflexions diverses*, op. cit., p. 492、及び、二宮フサ訳、前掲書、p. 344。

張に立って見るなら、この箴言に関しても、当初、ラ・ロシュフーコーはセネカへの批判と反発を明確に伝達する事を主たる目的として、「enfance」という同じ言葉をそのまま引き継ぐが、彼の思索が時と共に進むにつれて、箴言が他の思想家であるセネカのイメージに完全に覆われることを避けるようになり、その代わりに、自分自身の選んだ言葉で語ろうとする方向へと方針を転換したのではないかという推測が導かれるのである。端的に言えば、そうすることにより、実体験から生まれた彼自身の哲学が読者の前により鮮明に立ち現れると共に、セネカとのつながりを思想的暗示のレベルに抑える事によって、彼自身の哲学と、いわゆる賢人の説く絵空事との戦いの場としての潜在的イメージがこの箴言に付加される効果を狙ったのではないかということである。

第二に考えられる理由、それは、第一の理由にある実体験に基づく彼自身の哲学の内容を補うものである。この箴言自体が削除されなかったことは、逆に言えば、この箴言を通してどうしても主張したかったことがあったわけである。さらに、「folie」という語に変更した方が、その当時の自分自身の考えや主張、そう考える自分を取り巻く環境を上手く表現できるだろうと思い至らせるような何等かの出来事が起こったのではないかという推察である。ラ・ロシュフーコーは、1654年の秋頃までには134番までの箴言を書き上げて¹⁴はいるが、リアンクール草稿が出回ったのは、1662年末から1663年の初めに作成されていたとされる写本より少し前であり、第一版（初版）の印刷が完了したのが1664年の10月頃であるとされている。この事実をもとに考えるなら、「enfance」から「folie」への用語の変更は、少なくとも写本が出回る前後、1662年から1664年始め、第1版の印刷が始まるまでのほんの何年かの間に、何等かの出来事がきっかけとなってなされたことになる。果たして、この時期に一体何が起こったか。

周知のとおり、この時期は、フランスの政治や宮廷社会にとって、重要な変化が起きた時期である。まず、1661年3月にルイ14世が親政を開始する。1662年から1663年という時期は、絶対王政の時代がその成熟期に向かい始めてからおよそ1～2年という時間が経とうとする時期なのだ。この時期の変化

14 詳しくは、田中仁彦「ラ・ロシュフーコーはいつマキシムを書き始めたか」、『上智大学仏語・仏文学論集』18、1983、p. 37を参照のこと。

は国王の行った次の文化的・政治的働きがけの中にも読み取ることができる。まず、文化的働きがけの一例として、幼少時よりバレエを愛し奨励していた国王ルイ14世自身が、すでにフロンドの乱での勝利直後の1653年から、舞台上で地動説さながら太陽に扮し、かつてのフロンド党员やその子孫達を太陽に平伏す「名誉」「恩恵」「勝利」に見立てる等、国王とその威光に対する恭順を表明させるようなバロック的演出を行っていたことがあげられる。国王のバレエ出演は、親政開始後、1662年、1663年をはさんで、以後、彼が32歳になる1670年まで続けられるが、この様な演出は、言うまでもなく国王の威光を直接的に高めることに貢献することとなる。一方、政治的働きがけとしては、親政開始以降、国王が宰相を廃し、国の最高国务会議から王太后はじめ、王族や大貴族を排除して、その権威と力を奪っていったことが挙げられる。このような文化的・政治的働きがけにより、公の場で国王に恭順を示さざるを得ない状況に追い詰められ、力をそがれ、権力の中心から遠ざけられていく大貴族たちは、王に阿りつつ貴族としての生き残りを図ってゆかなければならない。その結果、高邁の精神と栄光に満ちた思想を理想に掲げ、王権に敢然と戦いを挑んだあのかつてのフロンド派の大貴族達が、もはや王に逆らうこともなく、反対に、自己愛に引かれて己を利そうとし、その愛顧を得る為に王の機嫌を常に窺いへつらい、先を争って、位階や威信争いを繰り広げてゆくことになるのである。1662年6月5日、6日に国王ルイ14世の命によって軍事教練の名目で開催された競技会の折、競技に先駆けて騎馬パレードが行われるが、アポストリデス(Jean-Marie Apostolides, 1943-)の言うように¹⁵、大貴族達のそうした精神的変容が、この騎馬パレードの中にはっきりと読みとることができる。このパレードによって、他の貴族たちは勿論のこと、数多くの武功をたて、反リシュリューの陰謀、フロンドの乱の中心的指導者として、時には王権に楯突くことによって示されたともいえるコンデ大公の威光と栄光でさえ、今や、君主に服従と賛美をささげ、その好意的な眼差しを獲得することにかかっていること、貴族たちが国王の偉大さを表す記号としての機能を果たしていたということが露わにされたからである。

15 Jean-Marie Apostolides, *Le roi-machine. Spectacle et politique au temps de Louis XIV*, Paris, Les Éditions de Minuit, 1981, pp. 41-43 参照。

1661年から1662年はこうした傾向が次第に顕著になっていく時代だと言える。言い換えれば、かれら貴族たちが、一種の精神的隷属状態へと陥っていく時代、貴族たちの精神的変容の起きた時代なのである。この時期にラ・ロシュフーコーが「folie」という語を選択したことの意味は、この語の中に、「enfance」という語では表しえない情念の意味合い、貴族達が引きずられ永遠に抜け出す事のできない利欲、虚栄心や名誉欲、権勢欲などといった情念「passions」の意味合いを含ませ、当時の自分を取り囲む現実の世界を反映させたかったからではなかろうか。

こうした歴史的出来事を前に、ラ・ロシュフーコーは、年老いた者にせよ、若くして野心に燃える者にせよ、自分可愛さに利欲を追い求める人間が引きずられる「folie」=「passion」の力、その抗えない強さを再認識し、その思いをこの箴言に託したに違いない。

かくして、ラ・ロシュフーコーによる「enfance」(MSL1)から「folie」(M.207)への語意の変更理由には、上記2つの理由が拮定されるのである。この変更によって、彼は、この箴言創出の根拠を、セネカの思想から、モラリストとしての人間観察、すなわち宮廷における自身の生きた哲学に移行させたと言えるだろう。

2. M.456番についての解釈

a. 「esprit」と「jugement」が表すものと「folie」が果たす役割

以上の考察により、箴言207で用いられた「folie」という語は、己を利そうとする心=自己愛の働きによって人間をその生涯にわたって引きずり回す権勢欲、名誉欲、恋、野心、虚栄心、金銭欲(吝嗇)、物欲、出世欲、嫉妬、恐怖などの「情念」=「passion(s)」そのものを示すことがわかった。

それでは、次に、箴言456

時として理性(esprit)によって愚者となる者はいるが、判断(jugement)によって愚者となる者はいない。

について見てみたいと思う。「esprit」と「jugement」という語を骨組みとした

この箴言の解釈にあたり、「folie」が果たす働きについては、拙著において一つの結論を得ている¹⁶ので、以下に、その概要を述べる。

まず、17世紀において「esprit」という語は、「raison」や「bon sens」と同義であり、理性のことをさす。考察 XIII「にせものについて」の中で、「物事の価値は理性と良識が定めるべきである」と述べ、箴言 365 では、「富や信頼をうまく使うには理性の助けが必要である」と述べていることから、彼が、理性というものに対し、先例や習慣、ないし先人から教えられた一般的価値観、世間一般の物事の価値基準であると同時に、富や信頼など世間的によしとされる価値の懸命な切り盛りの仕方について我々を助けてくれるものだと考えていることが分かる。つまり、ある目的達成への効果的手段の獲得を可能にする推進力、局面打開のための手段として解釈しているのである。

しかし、それはまた、「虚栄心は、理性に比べ、より多くの好みに反することをわれわれになさしめる。」(M.467)に語られるように、時として、魂の充足とは反対の方向へと導きかねないもの、ある一定の限界内での有効性を持つにとどまる、相対的なものなのである。というのも、人生には、理性といういわば実践知では手に負えず、人生の既成概念や制度などでは対処できない現実や混乱が起こるからである。具体的に説明するなら、例えば、目に見える利がマイナス値をさしても、そこに本人の内面の充足、真の幸福があるというような場合、あるいは本人が一定の社会枠、所属する社会の決める一種のルールに従わずに、独自の生き方をしてゆこうとする場合などに、この「理性」の秤は最も適切な指示を与えることができなくなってしまうからである。

一方、そういった現実に対処し混乱を打破するものとして登場するのが「jugement」＝「判断」である。上記「esprit」に対し、「jugement」という語はいかに定義されるべきであろうか。箴言 97 において、「人が理性 (esprit) と判断 (jugement) を別々のものと思ったのは間違いだった。判断 (jugement) とは、大いなる理性 (esprit) の光以外のなにものでもない。この光は事物の奥底まで貫いて、そこで見るべきものをすべて見、見えない (imperceptibles) と思われるものも見とる (aperçoit)。だから、判断力の効能とされていることは、ことごとく、理性の光の広大さのもたらすものだ、と認めなければならない」と説

16 詳しくは、柴田恵美、前掲書、pp. 82-103 参照。

明されるように、「jugement」とは、パスカルが言う繊細の精神にも通じる、己にとって本質的に大切なものを直観的に選び取る働きのことであると言える。また、この箴言によって、ラ・ロシュフーコーが、「jugement」と「esprit」を対立すべき全く異質なものと捉えずに、「jugement」を、「大いなる(光)」という言葉によって、いうなれば一段高い「esprit」と捉えていることがわかる。つまり、外からでは見えない事物の奥底に隠された物事を、光があたりを照らし出すように見て取る力をもつものとして「jugement」が説明されているのである。

ラ・ロシュフーコーにとっての「判断」(jugement)とは、「理性」(esprit)の様に論理や世間的な価値に囚われることなく、先例、習慣、一般的価値観、論理を超えたところに存在する基準、ある感覚に根ざす、己の内にある「生まれつき持っている光」の大きさ、深さ、鋭さに基づいて、複雑多岐にわたる要素の根元にある本質を見極める事なのである。また、それは、「見逃さずにすすむことがほとんど不可能なくらい非常に細やかで数多い原理をひとつ残らず、しかも一目で見て取るよく澄んだ目、理論の積み重ねという方法によるのではなく、「voit à peine」、「sent」という言葉に表されるような「感じ取る」というむしろ感覚的な働きによって、己にとって本質的に大切なものを直観的に選び取るのはたらきなのだということが理解される。

b. 「folie」の介入

ところで、こうした、通常の理性よりむしろ上位に位置し、並の人間には手の届かないより大きな「光」を必要とする「判断」(jugement)とは、理性を超え出る一つの飛躍なのであって、そこでは大きなエネルギーが要求される。理性という日常性を超えるこのエネルギー、その源こそが「狂気」=「folie」といえよう。そして、この「狂気」は、箴言217

剛胆とは、大きな危難に直面した時に襲われるような狼狽、混乱、恐怖などを寄せ付けない境地に達した、魂(âme)の並外れた力である。そして、英雄たちが予測だにしない恐るべき局面に際しても己れを平静に持し、理性(raison)の自由な働きを保ち続けるのは、この力によるのである。

で述べられたこの剛胆の如く、精神の弱さや怠惰を忘れさせ、自己愛の働きや常識的尺度、他人の思惑、あらゆる邪念をもよせつけずに、言うなれば、一切の現実を捨て去ってある一点に自己の精神を集中させうる様な魂の高揚であり、尚且つ、その激しい傾向の極みなのである。

また、モンテーニュ（Michel Eyquem de Montaigne, 1533-1592）の『エッセー』 *Essais*（1580）からの抜粋、

最も過敏（subtile）な錯乱（folie）が、最も過敏（subtile）な知恵から生ずるのでないなら一体何から生ずるというのであろう。（……）狂った人間の行為を見ていると、狂気というものが、人間の魂（âme）のもっとも敏活な働きとどんなに密接に結びついているかがよくわかる。自由な精神の元氣溢る高揚や、崇高で非凡な徳の行為が、狂気と見分けのつかないほど近いことは誰でも知っている。

を下敷きにしたラ・ロシュフーコー自身の箴言

最も微妙（subtile）な狂気は最も微妙（subtile）な知恵からなる。（MS.23）

によって、「魂を狂気のごとく激しく高揚させることは、時として卓越し洗練された知を持つ者に崇高で非凡な有徳の行為をやり遂げさせる」もしくは「明晰な知を持つ者だけが魂の極度の高揚という狂気によって偉業を成し遂げることがある」という主張がなされていることが分かる。「創造的狂気」とも言えるこうした狂気は、本質を見極める研ぎ澄まされた直感力を持つ者だけに許されたもので、逆に言えば、自己愛や気質にその目を曇らされた者たちには察知不可能なものだというのである。また、ラ・ロシュフーコーは、そうした狂気を生きる上である能動的な役割を果たしうる一個の独立した存在、積極的意味合いを持つものとして認識し肯定しているのである¹⁷。

こうして、ラ・ロシュフーコーは、己自身の判断という創造的成果を得る可能性を、狂気というエネルギーの介入の中に見出したのである。

17 同書、p. 101。

箴言 456「時として理性によって愚者となる者はいるが、判断によって愚者となる者はいない」は、こうした「狂気」(folie)の介入によって初めて理解されるのである。自分の本性・本質にとって大切なものを得ることが至福なのであって、それは他人の評価・世間的尺度に惑わされることでは得られない。至福という魂の充足に至った者を愚かだと言う者は誰もいまい。「判断によって愚者となる者はない」のである。また、箴言 310「人生には時として、少々狂気になれば切り抜けられない不測の事態が起こる」も、同じ文脈で解釈すべきであろう。予測可能な事態は常識で十分に対処できる。一方、不測の事態とは、そうした常識が通用しない事態のことであり、そうした事態においては、自らの運命と勝負、全エネルギーをかけた「判断」だけを頼りに対処することが求められるのである。だからこそ、「狂気なくして生きる者は自分の思っている程賢くはない」(M.209)と彼は言うのである。

以上が、「esprit」「jugement」其々の語の意味、「folie」の介入を必要とする箴言 456全体の解釈についての概要である。

c. 魂を高揚させるもの

それでは、この、自己愛の働きや邪念をも寄せ付けず、一切の現実を捨て去ってある一点に自己の精神を集中させるような、常人が通常では察知できない物事を掴み取る為の、洗練され、研ぎ澄まされたものである「創造的狂気」を生み出すもの、魂を激しく高揚させるエネルギーは一体どこから来るのか。

箴言 404で、ラ・ロシュフーコーは次のように語る。

自然はわれわれ自身の知らない様々な能力と才覚をわれわれの精神の奥底に隠したらしい。情念 (passions) だけがそれを掘り出す権限を持っていて、時々、人為の及びもつかない確実 (certaines) で健全 (achevée) な見識をわれわれに持たせるのである。

「情念」とは「理性を超えた激しい心 (âme) の動き、もしくは、魂を高揚させるもの」であることはすでに述べたが、この箴言で語られる「自分自身も知らず、隠された能力と才覚を掘りだし、人為の及びもつかない確実で健全な見識をもたせるべく魂のエネルギーを激しく高揚させるもの」とされる「情念」の

定義を、先に述べたラ・ロシュフーコーにおける「創造的狂気」の定義、「一切の現実を捨て去ってある一点に自己の精神を集中させ judgement を生み出さう様な魂の高揚」という定義に照らし合わせるなら、ラ・ロシュフーコーの言う「創造的狂気」を生み出すべく魂を激しく高揚させるものと人為の及びもつかない確実に健全な見識をもたせるべく魂のエネルギーを激しく高揚させるもの＝「情念」(passion)との働きの方向性とイメージが完全に重なること、言い換えれば、「情念」が魂を激しく高揚させることによってこの「狂気」を生み出すことが理解されるのである。本質を見極める研ぎ澄まされた直感力を持つ者だけが、「情念」の生み出す「狂気」をもって「創造的狂気」となし、その「創造的狂気」により「judgement」を得ることができるのだ。但し、箴言456に介入する「狂気」(folie)を生み出すこの「情念」(passion)が示す内容は、箴言207に示されるような様々な欲望のことではありえず、言わば、何かの目的を達成しようとする強力な思念とも言うべきものに近いと考えられる。明晰な知と本質を見極める研ぎ澄まされた直感力を持つ者が強力な思念としての「情念」をもって魂を激しく高揚させ、「狂気」を生み出す。この「狂気」こそ、生きる上である能動的な役割を果たしうる一個の独立した存在、積極的意味合いを持つものである「創造的狂気」なのであり、その「創造的狂気」の作用によってラ・ロシュフーコーの言う「判断」が生み出されるのだ。

かくして、『箴言集』において、人間を翻弄する欲望とは別の、欲望から切り離された純粋な思念としての「情念」、言わば浄化されたとも言える「情念」の存在が確認されるのである。

ところで、本論1のcにおいて筆者は、箴言207で用いられた「狂気」(folie)が示す内容は、「情念＝理性を超えた激しい心(âme)の動き、何かあるいは誰かに対する強い執着」であるところの「passion」であり、この箴言には「folie」＝「passion」の諸相(folies=passions)である、恋、野心、虚栄心、金銭欲(吝嗇)、物欲、出世欲、名誉欲、権勢欲、嫉妬、などに一生を通じて引きずり回され、決して心の満たされることのない人間の姿が描かれているとした。この箴言207で語られる「情念」と箴言456に介入する「狂気」を生み出すべき「情念」を比べるなら、ここで、前者が人間をマイナス方向へ、後者がプラス方向へ導くものとして語られており、其々が人間を正反対の方向に導いていることが確認されるのである。ラ・ロシュフーコーは、箴言207で「情念」の否

定的側面を、箴言404および456によって、「情念」の肯定的側面を述べ、それがプラス方向に働く可能性を示唆したのだ。

さらに、われわれはこの比較によって、ラ・ロシュフーコー自身が、極めて卓越した明敏さを持ち、本質を見極める研ぎ澄まされた直感力を持つ者に限定してはいるものの、強い思念としての情念が彼を善い方向へと導くことができると考えていたこと、言い換えるなら、思念としての情念、ひいてはその思念を貫く意志とも言えるべきものの内に人間を導く力の可能性を見ていたことに気づかされるのである。

『箴言集』が、情念そのものを悪と断罪し、理性に絶対性を置き、理性の力によって人間はあらゆる情念を克服できるとしたストイシズムを批判するものであると同時に、サブレ夫人の書評で語られるように、「人間が、自らに抱いている偽りの観念を認識させ、キリスト教なくして、人間は完全な善をなしえないことを教える著作」、すなわち、人間は往々にして自分の力で善を行えると思いがちだが、実は完全な善を行うことなどできない存在であり、善を行うにはキリスト教の助け、すなわち神の助けが必要だと考えるジャンセニスム的傾向をもつ著作であることはよく知られている。こうした情念と意思の観点から述べるなら、ラ・ロシュフーコーが情念の善性・有用性のある程度認めている点においてもストア主義とは異なっていることは確かである。しかし彼の示す、言わば己にとっての善への到達を許す「狂気の判断」、それを導きうる情念としての思念、その思念を遂行しようとする意志への信頼の態度は、原罪による自然・本性の腐敗を強調し、究極的には、神の恩寵なくして人間の意思は全く無力であるとしたジャンセニスムの「効果的恩寵」(grâce efficace)とは様相を異にしていると言えるのではないだろうか。意志の善用という一点から見れば、同じジャンセニスムの系統に属しながらも、恩寵は人間の意志の同意をもって効果を発揮すると考えるモリニスムの「充足的恩寵」(grâce suffisante)に類似した概念を採用する、スノー (Jean-François Senault, 1604-1672) の説く情念の用い方¹⁸の考えに通じるものがあるかもしれない。しかし、スノーがあらゆる情念を対象にし、恩寵を伴った理性による情念の用い方を、人間を

18 Jean-François Senault, *De l'Usage des passions*, texte revu par Christiane Frémont, Paris, Fayard, 1987.

徳あるものにする為の手立てであると見なす¹⁹のに対し、ラ・ロシュフーコー自身はすべての情念を対象にしているわけではない上に、「狂気の判断」を可能にする情念の善用に宗教的徳性を見いだすことはなかったに違いない。箴言456、ラ・ロシュフーコーにおける情念の善用は、あくまでも己にとっての善への到達に限るものであって宗教的価値に属するものではないのだ。また、プラス方向へと働く、情念の善用とも言える「狂気の判断」に徳性を見出すこと自体もまた、彼の言うところの自己愛に囚われることを意味するからである。一方、「様々な情念は自己愛のいろいろな嗜好に他ならない」(MP.28)という箴言からもわかるように、彼は自己愛を、世間的価値観に従って己の欲を満たそうとする時に、情念を支配するものと捉えている。箴言207における様に、情念がマイナス方向に働く理由、つまり人間が目を曇らされ、情念に生涯引きずられてしまう要因においても、彼がそこに宗教をもってしても抗いがたく抜きがたい、言わば独立的な存在としての自己愛の介入を見ている為、構造が2重となっており、その意味で、彼の情念に対する考察はスノーのものより複雑だと言えよう。

3. プラトン『国家』における「洞窟の比喩」とふたつの箴言の意味的関連

さて、先に引用した箴言97で示された「光」の観点から見れば、箴言456における「esprit」は、世間的な価値観、自己愛、気質、先入観などによって遮られ、光のパーセントが低くなっている状態であり、「jugement」は、「esprit」より一段高い、より大きな光であり、外からでは見えない事物の奥底に隠されたものごとを、光があたりを照らし出すように見て取る力をもつもの、理性の光に偉大さをもたらす力を与えるもの、先例、習慣、一般的価値観、論理を超えたところに存在する基準、ある感覚に根ざす、己の内にある「生まれつき持っている光」の大きさ、深さ、鋭さに基づくものとして規定されていることは前章で示した通りである。

ところで、こうした光の観点からの「esprit」及び「jugement」の考察から、プラトン(BC.428-BC.348)の『国家』における「洞窟の比喩」²⁰が直ちに想起

19 Ibid., p. 28 参照。

されるのである。両者には一体どのような意味的対応があるのか。対応関係を明らかにすべく、まず、「洞窟の比喩」の内容について、以下に必要な部分のあらましを述べる。

幅いっぱい広さの入り口が、光のさす方向に向かって開いている地下の洞窟がある。その洞窟に囚人が住んでいるが、彼らは子供の時から足と首を鎖で繋がれて、動くことも頭も後ろに回すこともできないまま入口とは反対の方向に向けられ、洞窟の底にある壁だけ見て生活している。彼らのいる場所から多少上に上がったところに火が燃えていて、彼らとその火との中間、高い所に通路があり、その通路に沿って、操り人形の使い手が自分の前面に設けるような障壁が築かれている。その障壁に沿って人間や動物などあらゆる種類の工作物が運ばれていく。それを運んでいる人達の中には、べちゃくちゃ喋っている人も黙っている人もいる。後方で火が燃えている為、囚人たちには運ばれていくものの影だけが見えるが、後方を通る本物は見たことがないので、その影が本物であり、それを運ぶ人の声が影から出ていると思い込んでいる。また、囚人たちが互いに話せるなら、彼らの間で影を見ながら、通過していくものを一番鋭く観察したり、次に何が通るかをよく記憶していたり、次に通るものを予測できたりする者に対し、お互いに名誉や賛美や賞を与えあったりしている。ある時、囚人の誰かが鎖を解かれ、首を回して後ろを見る事を強制される。影ばかり見ていた囚人は、本物の工作物より影の方が真実であるという認識から抜け出せず、火の光にも苦痛を覚えて、また壁の方を見ようとする。今度は、その囚人を強制的に洞窟の外へ連れ出し太陽の光のあたる所へ連れていく。最初は当然、眩しさのあまり何も見えず苦痛を感じるが、徐々に目を慣らせて、遂に太陽を見ることが出来る。囚人は太陽の光を知ってから、自分が洞窟の中で見ていたものが影に過ぎず、太陽こそがある意味で、彼らの見る全てのものの原因であることを悟る。

以上が「洞窟の比喩」の概略であるが、次に、この比喩に登場する各々の人や物が一体何を象徴しているのかを示していく。一般的には、まず、太陽はプラトンの言葉でいうところの「イデア」=善そのもの、壁に写る影は火から投影された物質欲、金銭欲、権勢欲などの快楽、囚人は影こそが真実であると信

20 長澤信壽訳注、前掲書、第七章、pp. 819-829 参照。

じ、それを追い求める人々、障壁で工作物の影を操る人々は、物質欲、金銭欲、権勢欲などといった快樂を作り出し、そうした快樂に向かせるべく見えないう所で囚人を煽る人々と理解されている。また障壁後方の火についてはプラトン自身による直接的な提示はない様だが、洞窟の壁に偽物である影を創出するものであることから、事物を照らし出すという点においては洞窟の外にある太陽（＝自然のものであり、十全たる善本来）の性質を受け継いでいるものの、そのものではなく、洞窟の世界というより狭い範囲でのみ適用されるものの、つまり質的にも規模においても狭小で、その性質を障壁で影を操る人間たちが俗的なレベルに移行させ、自分達の都合のいい様に変形させ利用しているもの、十全なる善からすれば時には偽善ともなりうるもの、という解釈が成り立つであろう。さらにプラトンは、囚人を洞窟から無理やり太陽の下に連れ出すこと、囚人の向きを変えさせること、自分達の見ていた影を偽物だと悟らせることを「教育」と呼んでいる。

この比喩を、ラ・ロシュフーコーが批判する当時の宮廷社会という場にあてはめつつ、「esprit」「folie」「jugement」という三語に焦点をあてながら、箴言456及び箴言207の内容に照らし合わせてみよう。

箴言456における「esprit」とは、世間一般の物事の価値基準であると同時に、世間的によしとされる富や信頼などといった価値の賢明な処理の仕方について我々を助け、一定の規範の中で損得を計算しながら上手に生きていくすべを教えてくれるものであるものの、利害や心情次第で容易に覆る相対的基準しか作らないものであるから、自分の利になる場合だけ良いことをするという様な利己的な計算の入った善行、いわゆる偽善に陥らせうるものでもあった。また、世間的な価値観、自己愛、気質、先入観などによって遮られ、十全たる善の光より、光のパーセントが低くなっている状態とも言える。例えば、ここに各人に与えられている物を見るための光があると仮定する。本来この光は、100パーセント降り注いでいて、各人はこの光を察知する感覚も持っていたとする。ところが、この光が世間的な価値観、自己愛、気質、先入観などによって遮られると、ある人には、50パーセント、ある人には30パーセント、ある人には10パーセントくらいしか降り注がれなくなって、感覚が鈍ってしまうことが起こる。つまり目が曇らされてしまうのである。この光が100パーセント降り注いでいる状態が太陽の下に照らされている状態であるとすれば、世間

的な価値観、自己愛、気質、先入観などによって遮られ、パーセンテージの下がった光の状態がまさに、ラ・ロシュフーコーの言う「esprit」に相当するのだ。また、これらの特徴から、「esprit」は、すべてを照らし出す太陽の光に比べれば質的にも規模においても狭小な、洞窟の内部を照らす火とそのままイメージが重なるのである。

また、影を追わせる影絵師は、個人の気質、自己愛を利用し、物質欲、金銭欲、権勢欲を刺激しつつその心を操ることで宮廷人達の服従を絶対的なものにしようと、水面下で密かに画策・扇動する国王ルイ14世である。国王はその支配力を増大し維持する為、「偉大なる王に服従し、阿ることにより物質的な繁栄と精神的満足を得ることこそが最良の善、至福への道である」といった自分にとって都合の良い価値観を宮廷人達に刷り込み、「すべての人間の情熱、弱点、失敗、秘密、利害について厳密に計算し」、それによって「人間を操縦する」為の手段である、王にとっての「esprit」＝「火」を使って陰を作り出している。一方、鎖に縛られ、様々な欲の現れである壁の上の「火」の影を幸福へと導く真であると思い込み、その影を追いつける囚人は、王にとって都合の良い価値観＝「esprit」をそのまま自己の「esprit」＝価値観、価値基準とし、自己を評価させ、精神的にも物質的にも他を凌駕しようとする自己愛という鎖に縛られ、利得と様々な欲、情念（passions）を追いつ求め、それを満たすべく国王に踊らされる宮廷人達にそのまま置き換えることができよう。また、通過していくものを一番鋭く観察したり、次に何が通るかをよく記憶していたり、次に通るものを予測できたりする者に対し、お互いに名誉や賛美や賞を与えあう彼らの姿も、互いに出世や権勢を競い合う宮廷人の姿そのものに重ねられるのだ。

一方、囚人達を振り向かせる教育の役割を担うもの、人々の目の曇りが取り払われるよう介助するもの、それが箴言456に介入する、ラ・ロシュフーコー独自の「folie」なのだ。この「folie」によって背後の火を見つけ、自分が真だと思い込んでいた影が偽物だと認識すること、認識させていたものの正体を知ること、つまり自分達が果てしない欲望に引きずり回されて満ち足りた幸福を得られない状態にあることを認識することは、一時的には、心に一種の虚無感＝目の痛みを感じさせるかも知れない。大抵の者は火の方を見ようとしまいだろう。しかし、火と影の実態を察知する能力すなわち明敏なる知を持つ者だけ

が、本質を見抜き、こうした隷属状態から解き放たれようとする強い「思念」＝「passion」により魂を高揚させ、そこから生じる魂のエネルギー、他人の思惑や自己愛の働きをも寄せ付けぬエネルギー「folie」の介入によりこの目の痛みを超える。そして、その「folie」が「創造的狂気」となって、彼を太陽が全てを照らし出す十全なる光の世界、理性の光に偉大さをもたらす力が与えるもの、すなわち「jugement」という「大いなる光」の世界に導き、彼は己にとって本質的に大切なもの、至福＝善を手に入れる事が出来るという解釈となるのだ。

ところで、これに対し、ふり向かせようとしてもふり向こうとしない者、一旦ふり向いてもやはり影の方が本物であるとしたい者、世間的価値観を引きずりつつ自身を利そうとする心である鎖を外せずに、野心、虚栄心、金銭欲（吝嗇）、物欲、出世欲、名誉欲、権勢欲、嫉妬といった情念（folies=passions）に一生引きずり回される者の姿、洞窟に留まり壁に映る影を追い続ける囚人の姿が、箴言207に重ねられる事は言うまでもない。

また、「洞窟の比喩」における「passion」の働きについては、影の方を向き続ける囚人が引きずられる情念が207番の「passion」と、向きを変えて太陽の照らす世界に到達せんとする者の思念が456番に介入する「passion」の働きにそのまま重ね合わせられること、さらに、その方向性が、囚人の見つめる方向性と同様、プラスマイナス正反対に向いていることがここで明らかになるのである。

かくして、われわれは、ラ・ロシュフーコーの『箴言集』という経験的哲学の世界の中に、奇しくも、哲学者プラトンの説いた「洞窟の比喩」と同様の世界が描かれていたことに気づかされるのである。

4. 結論

以上、決定版207番及び456番の二つの箴言を構成する「enfance」「folie」「esprit」「jugement」といったいくつかの語に注目し、その語自体の意味、あるいは用語の変更による内容の変化やその意義等を時代的背景と共に確認することにより、2つの箴言の解釈を示してきたが、それと同時に、それら2つの箴言において、其々異なる意味を持ち、プラスとマイナス正反対の方向に働き

かける「passion」についても、比較的観点からの一つの考察を得られた様に思う。また、「passion」がマイナスに作用した場合の人間観察、プラスに作用した結果生み出される「狂気の判断」、それを導きうる思念としての情念への信頼の態度といったラ・ロシュフーコーの小さな人生哲学の世界を抽出できたのではないだろうか。さらに、プラトンの説く「洞窟の比喩」の世界にこの二つの箴言を読み取ることでできた事実により、人間の思考における普遍性を改めて認識することにもなった様に思われる。

帯剣貴族として知育より身体的鍛錬の方に重点の置かれた教育を受けた為に、ラテン語もほとんど解せなかった彼が、ましてやギリシャ語で説かれたプラトンの哲学を、書物から直に学ぶことはまずなかったはずである。従って、『箴言集』に表れるこうした哲学的思考は、純粹に彼の実体験、宮廷という環境とそれを構成する宮廷人を観察することによって形成された経験的概念である。

また、この二つの箴言は、「情念」あるいは「情念」が関わる「創造的狂気」をテーマとした彼の経験論的概念としての哲学において、人間が置かれるべき最初と最後の姿であるとも言える。利得を求める心の介入によって、虚栄心、物質欲、権勢欲などの情念に否応もなく引きずり回される人間の姿を提示する箴言 207 をまず示し、引きずり回されることによって心が満たされず、至福を手に入れることのできない人間はどうすればよいかという問題提起に対し、最終的に出されたラ・ロシュフーコーの答えが箴言 456 なのである。だからこそ、箴言 207 は当初、最初の手書き原稿と言われるリアンクール草稿の 1 番に置かれ、彼の人生哲学の結論であるこの箴言 456 が、最終版である第 5 版になって初めて姿を現すのであろう。

彼の見出した、あたりを十全に照らし出す光の世界は、もしかしたら神の光に繋がるものなのかも知れない。しかし、少なくとも彼の実践的哲学の世界そのもののの中に神の姿は感じられない。『箴言集』の世界では、信仰の名のもとに行われる様な、善・悪、正義・不正の裁定は行われてはいないのだ。彼にとっては、人間が信仰に身をやつすこと自体も、一つの執着の表れなのであり、自己愛の一つの形でありうるのだ。

彼の示す「イデア」の世界は、己一人により恃む、あくまでも人間としての己にとっての善の世界であり、孤高の世界なのである。

「狂気は一生ついてくる」と彼が言う時、もしかしたら、貴族としての名誉と威信を失うまいと様々な「folies」に翻弄され、とりつかれたように最後まで執拗に戦いを続けたフロンドの乱の終結後、年を取って美貌を失った時に、今度は宗教という狂気にのめり込み、周囲をうんざりさせるようになったとも言われるロングヴィル夫人（Anne-Geneviève de Bourbon-Condé, Duchesse de Longueville, 1619-1679）、かつての恋人の姿も彼の頭をよぎったかも知れない。